849
55

峡入

国立国会図書館　タイトル『地震後世俗語之種』 請求記号 849-55

ガラス使用

地震後世俗語之種

初編之三

国立国会図書館　タイトル『地震後世俗語之種』　請求記号 849-55

ガラス使用

849
55
特別

一名本城

四季
絶景
借株の圖

會席の樓我
往中第一樓とい

国立国会図書館　タイトル『地震後世俗語之種』　請求記号 849-55
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『地震後世俗語之種』 請求記号 849-55

ガラス使用

四季絶景假寢ヶ岡之風流釃喜源述

春を梅ヶ香ニ慕ひて初音哢鶯軒ニ歴廻
桃櫻笑を含み海棠露ニ含の時ニ臨て青
柳糸を垂山雀瑠璃鳥も是を慕ひて緑ニ
添ふる呉竹常盤なる松ヶ枝ニ哢毛氈ろ
なして真薦なる席ニ携田樂を朋ぞとする
身のいつ鹿馬の齢角ヶ幾ニ雖怪月ニ過日
を送るに此我を志し祐と柴垣の垣根の
山吹衣更て卯の花ニほふ庭の面を月か雪
のと疑へも夢覺よと郭公夏來ルりと言儘ニ

牡丹の薫り鼻染て住川戻法(のそふ)蝶庵乃軒
端ニ咲つゞく紫白の藤ニ艶なるハ詠盡せぬ
程も奈し金色なす菜の花乃花より田の面に
苗代の水引へきも其風景沖の浪静やか
まして早處女の菅ニ小笠遠近ニ見え遠音
ニ聞ゆる鄙歌ニ田鶴鳴まゝるかと怪み名ニ
流れゝる千曲犀川の清らかなる ニ船路かと
疑もむ歴なるすれむへ山の山まゝ河ゝ祐ニ假寢
ヶ岡その鴈行還苅穂さらへ貢のたゞ朝夕ニ
民の竈戸を賑ふと御製まし海に叡覧も

おしそ迷ありや有明の月もくはなく初霜哉
照ともよし色善光れ御寺の鐘の時なく年し
業し花相似歳々年々同うして頭に雪を積
迷とも暮行歳をはしらぬかほ詩佛老人の
筆もさらび信中第一樓と書遺さ給しも
實にや此假寢ヶ岡の樣なるへし過ましは
此邊りなる農夫畑哉耕て金色なる昆沙門天
の尊像哉得たり爰に本城かり祕ヶ岡を寅の
かゝにあたり尊天幸ひの縁によりまゝ鬼門
相當の里なる迷も爰に一宇を建立し尊像哉

奉遷るに日にまし靈驗あらたなる秘佛に
崇奉り常に前立の尊容を諸人に社を
拜せしむれ年連しにしてなのつかゝ
奉納出来ありけるにや愛染菅公稲荷
の堂社勸請あり石檀下りし平地に被の
樓におきて諸先生書畫の會合哉催し
常に會席哉高ふまして長閑なる春の
日より冬を雪見にさらはしまして四季
おりしの風流を御開帳盛んの古跡
はいをさて古を繁花にあらはめ也 [illegible]

後世噺の種實法をせずとも一ト度ハ
嗚呼がましきも唐箕ハかゝる吹ゆゑ
とさい語まで云ふ蚯蚓の歌も歌なりと
もつて秘ざるものハ是畢竟醴酒の喜
源ハ尚かせゝるたもむもてとこゝろひぬとて
かくなん

去程に此店按笑ゆゑありて其賑ふるお詠ふ夜店の
ともし火白昼我歌きこ市町の老若近憐ありくの
諸人を喜ばす他國遠近の旅人長途乃旅行の

管我もいとゝ賑しきにうかもたち時の過るも
しらせぬ常念佛の時の鐘もゆくも其の刻我告ぬに
あのあし者に店せ我志ますを我志へ東詣に御行ふ
きつしさる往還の雜集ハ除右に臨みて御出堂に
入れまゝは金銀珠玉錦服ありて輝し通夜まるべく
充滿し一口同音に祝名我唱へ行かれも鳥獸といへども
りつ遠我拵ゝ上品生の心我發さらんや共に合掌して
佛緣我誓ひ三稱して表向拜まで立ちつゝに其の刻
おしゝ過ぎしとも其賑ふる鞠しく又云語に難述と
なりに程もなく我其の叫ことなほしおそれ歟

国立国会図書館　タイトル『地震後世俗語之種』　請求記号 849-55

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『地震後世俗語之種』　請求記号 849-55

ガラス使用

受とも死場を妻子と共にして打果なん
子として親の安否を我なのまゝか苦痛に引留
妻にして夫の行衛を志らん空猶一命終り
なんかゝる奇怪の時に臨て妻子の愛憐に
迷ひ往せ変定せざるの地の謗りも恥へきか
皆く煩悩難去といへとも夫婦死後に及
て知かの子供何を頼にか成長せん共に死せば
我らか死後香華を誰かまつ向ん是皆凡夫
血流の情愛にあ因るその所為にて一心変
定して一下を見りに山門の下々に至るに案り

たかたは闇夜に等し我その中を我を呼ぶ
取縋る妻子をたゞ先出店にありあふそのとも
かゝいつまでも無難なりけまは一下先公を安から
志むといへとも共に安否も尋問ふるなりしたゝ
此変に死場を極めて無欲し警惕するのみ
なり然るに群集のみ〳〵親夫にとなれ
妻子道連ヲ見失ひくるまゝよりれば思ひに
其名を呼て尋求る聲すれはまして又遠くに
響き一方の立変に吟ひ啼喚く声
心耳より通し地震なる地狼狽なとしに

声あり徐く地震なるゝ我志りて又あそるゝハ
のゝる大変の事なれば地ゝれて土中に埋なん
る我国て梅笑堂に行のあふ板ノ舗ハもの
なとを取出し鋪石の傍に猶並へ其災害を
防かんとして此時漸く神佛我祈念をる
ゝ我案し北辰霊府尊星五象頭山
大権現一代の守護八幡大武神妻子ともく
信仰し持合せたるきこれものもなけまは服
若川秘撃り我押切りて仏願我祈ひたりを
うち諭まは何鹿に出火となり盛へ燃立

方角兵大門町上のかゝ東横町中程東之門町
西側まで中程此三ヶ所我先とも火てすよくと
呼騒立るゝ黙しとゝへとも大こ狼狽発しのみて
尓自祈んものもなく途方に暮るゝなり なり
其ほともなく西之門町新道急より火の手
盛んに燃立焼時に沸本性こ我危くみえなり
諸人たゝたうせんとして氣我損じ竈我棄れ
神号我唱へ又孫名我唱へて苦患我家に
とゝむる時命なるこのなる悪魔悪火なる我火氣
盛んになりて本願上人掾御院内中石畫戸我

勝たる間に燒きひて二王門へ吹かくる火勢風
まけて恐し其二王尊ハ始め迦羅佛の尊像
昆沙門大黒の兩王ハ燒損ひ早くも左右の
見世店へ吹ひ遠く左る火勢増く盛んなり
志かるかゝるも横山宇末相ハ未遑ハ遠く
清ゝ東町宮石町新町ハ色もかゝりける也
いづまハ先いづまハ係とも其程ハ見かゝる新
道口ハ西ハ門樋に路所弥陀院何まハ限り
共見かゝる市町一面の火氣空にうつり
例の下ゝまハ壓死人の啼叫声親ハ慕ひ

子ハ叫る声神佛祈念の音喧まハ清ゝ憐まし
まして此上のなり祈ハ悲歎まるゝおほかゝる
志かまるゝも比震鳴霧まる事黙しき呵責の
苦患も是まて是なるかゝ本ゝ其居なりける我家に
保らんとも一面の大火何とも能忍ゝ思ふ家に又
庄五郎ハ我家に祈て妻ハ我等ハ子ハ我待合
ハ我家も何鹿火の中なる屋しけ事
ハ家ハ火乃かゝるまい家財をかゝる
恪に何ゝ清剃れと書物ハ何とかして
取出し若も我家の燒失し是迚も遁まし

がらはその由ありて可否を知りて顔たしくい
二條殿下様御震筆の顔面我々が年来の
願ひなりしに賞見より賜りし故大切の品
として同御震筆の掛物并に御染筆
六歌仙の顔面何にても是皆同様の品なれば
申事なきて人気なりとて我顔を損ずる怪我
いろいろとなせし心得なく蔵に逃よりて仕たるべき
事もありけれは引返して親子が出ず取たし
我は四五年此かたの大病此ごとく後年臨乱し
心気相通ずる込み逃との勢ひしりぬはさる書の

寿命無覚束お頼みを母子に我が源力が
あらせるべく願ひ其うちにも乾之家成長が願なり
まして幸此の縁もあれば女房は後川に留置
候なりし常となく物いふ一つ何にせよ気遣いも
聞苦しき様子天のめぐみ引揚なしかねても
可子女年七歳の節何とぞなんと親も同じ如
嗚呼しれ時我ら何し乾三を一つまうし
知りなまじとも三七の魂も百まで迄母が
撫で此男子をうちの譲書て我か一と此
家知りの此親の教我が背けて人並になりて

厥かとしまつるの多かりけるも是後悔にして
風にたゝる成長して他人の厥かし免なし
うけぬ世にさとらしなんと嘆しまゝなれ
数度の地震明動おせ後しく諸人稱名なし
唱ひ呟嗅聲あるまゝ家ゝ市町是いと面
黄くたるか大火連くたる白黒の煙り所なし
吹立火のこと是宮に飛ひ蜜火に逢りなし
見履せざ下るまゝあらゝせる本所物寶倍
夜燈佛菩薩立連立たるその為く
善義の類ひ手の裏なし逆にかぬくあるひは

例まゝ或是潰まゝ手分の宅とつも其形ちの變
ざるハかゝし目もなりてらまゝぬ、なりせるまゝなり誓
ありて在人市是息なしもつがれ立通りぬ
ゝ毬なし尋ね問ふにいつまゝなし行いつまゝなり
たるや其順話を志ふれ或是例家の上を踏
なるゝハ潰れかゞりたる家の下をうゝぐ也
右ハ吟たりハ猿猴その雛濃なるハ中逃
がくし潰まゝたる家毎ハ腰なしうたまゝ例
まゝたる家並にハ手足なしたるみあるひ黒
髮だかり なしおもへらるといへ坐も逃おはちる

国立国会図書館　タイトル『地震後世俗語之種』　請求記号 849-55
ガラス使用

ニ能助け給へ救ひ給へ坐啼叫声耳我
つらぬ我苦痛のありさ夜目ニ遮りたけつ
まろ云川数萬乃人々右往左往り
逃去り歴廻て火事よくといふ程に
例ま家潰れ家の下に是壓死と坐もに
息ある人も絶たるも此世からあるとうくまつ
地獄呵責の苦患も形やうんと語るもあるか
しこれ是身の毛も弥立斗あり
火事是横町より上のかゝ盛りに志て風
も西南とおほえうほをよもや檜重後町の

道是軽焼ハ被其御じまて御制札の
事ハ慥なるかゝ用領あり此まゝ必ん死
なるまゝ事中傳へよとのるまそは書物ニ外
おしのこのハ持出しこととのるまそはなると邂逅
するまゝもあらぬるほどに西ゝ門新道道乃
出火をやくも御本坊なる角の御蔵へ
火の掛りなるを我人声騒愛なたつる我
右に見やまたりにあかむまは法然堂東ゝ門
進しく上ニのかゝへ燃登りなるそのあり其後
怖しき此所ハあらんなるかなるとそ此店

国立国会図書館　タイトル『地震後世俗語之種』　請求記号 849-55

ガラス使用

梅笑堂丹ありしが戸柳きゝ玉 外かしの名の
我持出し板戸鋪物のたくひなとすけ持て
御本堂のかたへ幾度迯て迯去りぬ當所の老若
きいふ丹及ひ遠近の諸人潰家我餘く迯
のひたる人しハ老母ごんごとつに小児我抱ひ
又ハ祿まてくり獄なんと我前にあてまた
ある人きて禪二幅斗りまてゆゝつや多
幸幾命我投り悠家人ハ老人我
貧頁て迯去る諸人殊更豪者にして
玉歌幾見るに悪ごとて志かるに又此所に

あらんなりの危きことて我や老人まで後生し此
迯の它けまハ市も海に家内我引連て御本
堂の裏なる御供所の傍まて迯去りしが
爰に始て御供所の清れたるありさ海を
見るに鳥籠の如幾我石向なんと思ひつけて
碎たるがごとしあまた我柱御堂を鋪居此
材木乃形我ヨ加たゞ地震のおほいなるを
驚怖去る乃みなりかゝる所に市も海に
まれし病ひ重り今まで一命絶ぬるかと
おもふ斗りかゝる災害のありとも志らぬ藥り

とて用意もなしまづかの小堰に流るゝ泥
の我手に交ゝ口中我潤し心我補ひ
氣を慥に出せしとて妻子を繼りて介
抱し偏に神佛の愛憐納受我大業に於て
今一と度を助け扶ひ給ひとて能歎くのみ好
かるわしも誰いふともなく今まで山門へ
火かけ御本堂も無覺束早く此所我
逃る風しとてまゝこのや我先人先に出て
老たる我厭ひ細我抱跡我も見出し妻
逃去りけれいかゝる病ひの重かりしも身の

亟所もいふぜるかと肩にまかり腰にとり川岸
用水堤の東のかゝ青麦畑我宿と病ひの
床に是薄漸り一重逆上烈しきして是迄
如きは妻子うちあすそくつろげて火
燵とし介抱なせる身のうへも次第に治行
小夜風我着病にのみ氣我奪ひ是寒と
云ともたゞふる母ものなしかゝるわしも
祐名喝人數多の人音いかに我を大火にて治
木陰より次第に近しなり如るを去
諏むまは無勿躰も 三國傳來の萬像の

国立国会図書館　タイトル『地震後世俗語之種』　請求記号 849-55
ガラス使用

御寶龕引續て御印文前立本尊
の御寶龕錦帳所なり我暉し歳数
を重ね諸人是此時なりて何鹿御佛の御寶輦を
掻奉らんとて無勿躰もふ浄もあん等御輿を
取付一心禰名喝人宛感涙して我供奉志
へる其先なるハ御朱印長持警固前
後我打守護嚴重にまゝ我見ハ小ける是我
見上ニ数萬の人しきりや御堂も危
かゝ成なる時前の至来して今社此世れ
減せるかゝりける苦患の今の世ハ生合なるか

○宝永四年
亥八月
十三日
今之
御堂ニ
入佛
開しまして
より今弘化四年
まで百四十四年
にして
御立退なり

国立国会図書館　タイトル『地震後世俗語之種』　請求記号 849-55
ガラス使用

然しせよ我もしつ我ても佛縁こせ大す
なもせ御寶合龍の清涼墓ひ堀切道の右の
りて本堀近き田畑よて所々素より假寢圖
御樂安置我定め始へ幕打迫し
守護行もは前後左右に近去し数萬の
人々野宿志て心を禰若喝へつゝ咽け行
京我うち泳免あ我も果て我居たりける

国立国会図書館　タイトル『地震後世俗語之種』 請求記号 849-55
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『地震後世俗語之種』　請求記号 849-55

ガラス使用

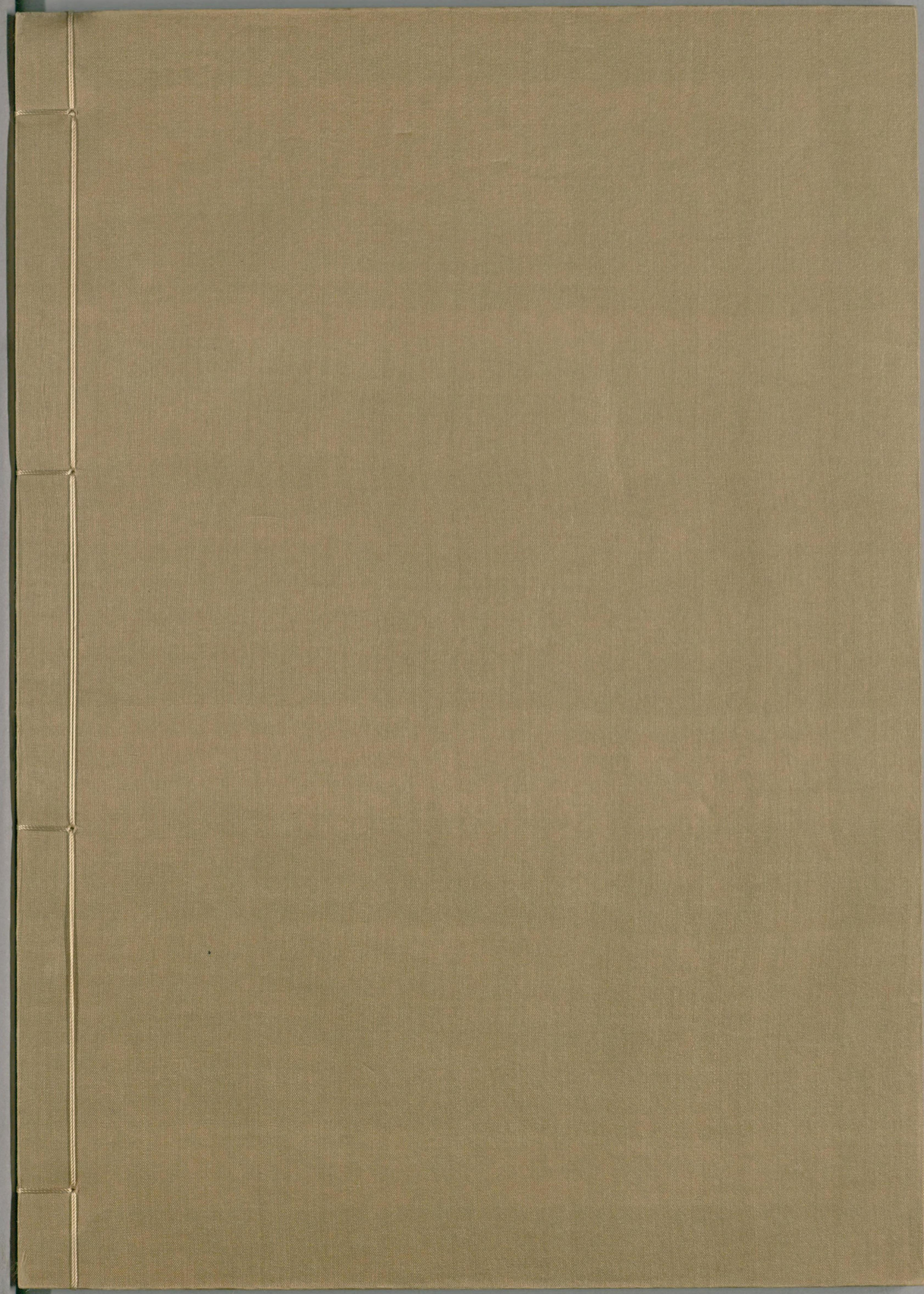
国立国会図書館　タイトル『地震後世俗語之種』　請求記号 849-55

ガラス使用

849
55

国立国会図書館　タイトル『地震後世俗語之種』 請求記号 849-55

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『地震後世俗語之種』　請求記号 849-55

ガラス使用